

# 若者による「若者観」の受容

——若者の社会化を促す試み——

島 田 博 司

## What do College Students Think of People's Comments on the Young People of Today?

SHIMADA Hiroshi

**Abstract :** That the young people of today are not up to the mark is a matter of common talk among ordinary people. For example, it is said that young people have no manners these days. This kind of talk brings up such topics as the self-examination of young people, their ignorance, and so on.

This Research Note tries to report on “the present situation of comments on the young people of today” from the viewpoint of college students. For this purpose, I requested college students to collect comments on the young people of today by conducting interviews, reading magazines, watching television and so on. After I had made a list of comments on the young people of today, I asked them to give their opinions and comments on the contents of this material.

These comments can be classified into six large groups as follows : Group One is concerned with sweeping statements about the young people of today. Group Two is an analysis of negative-toned common talk about the young people of today. Group Three is an analysis of social change in Japanese society. Group Four is an analysis of inconsistency in comments on the young people of today. Group Five is about the chance of knowing the reality. The last group is about some requests for help made to adults.

As a result, this trial urged young college students towards socialization.

**Key Words :** young people of today, common talk, socialization

### 1. はじめに

「最近の若者は」ではじまる若者評の語り口の定番は、語り手が上の世代で、言葉の響きはマイナスのトーンで、下の世代への嘆き節を交えた説教調で、といったところだろうか。とくに「いまどきの若者は」ではじまる語り口になると、厳しくなりがちである。その言葉の後には、「昔はよかった」式の、過去を肯定的に評価し、美化する表現が続きがちである。

他方、聞き手である若者の反応は、いわれてイヤな気分になったり、反発・反論して「最近の大人」の批判をしたり、もっともだと反省したり、無視したり、

なにも思わず聞き流したり、といったところだろう。

やりとりの展開はともかく、いつの時代でも「最近の若者は」という語り口がなくなることはないのは、それなりのニーズがあるからだろう。

#### 1.1 ある授業の断章

ときは、2004年7月5日。甲南女子大学人間科学部人間教育学科の2年生対象の専門科目「教育社会学A」で、学歴社会の問題状況を説明するなかで、私語やメール私語について話をした。授業のラストでは、いつものように授業評価用紙に授業感想を記入してもらった。

その日の授業では、10年前の1995年、当時私の本

務校だった武庫川女子大学で授業を受けていた大学3年生が、授業感想で大人に反撃を加えた一文を紹介した。彼女いわく、「実は私、喫茶店でバイトをしているのですが、40～50代のおじさんがよく話しかけてきます。『最近の若者は、なっとらんね。髪を茶髪にして…』。『そうですね』。一応同意する。しかし、心のなかで、『あんたらもたいした大人じゃないだろう。いま、砂糖の蓋、開けたでしょ。片づけもしない。自分勝手にバカだとあんたはいうけど、変わらないじゃないか、私たちと』。『そうですね』と笑う私の笑顔には、理解しようとしめない年代の大人たちへの皮肉と嘲りがあります」と。

この文を受け、2人の女子学生が次のような感想を書いていた。

感想①：「1995年の大学3年生の方の意見には、共感を覚えました。大人って、『最近の若者は、…』とよくいいます。『…』に入る言葉はたいてい否定的なものです。それに関して思うことがふたつあります。まずひとつは、若者というふうにはひとまとめにしないでほしいということ。『…』が否定的なものならなおさらです（そういう私も、『大人』とひとまとめにいつてしまっていますが）。もうひとつは、自分のことを棚にあげて、私たちを批判しないでほしいということ。まわりには、私より常識のない大人の方々がたくさんおられます。自分の行動を正してから、そういうことをいつてほしいと思います」

感想②：「大人たちはよく、『最近の若者は』というのが、私たち若者からすると、『最近の中高年には、なにをいつても無駄だ』と思うことばかりである」

まず、感想①の前半部には、若者をひとまとめにして語らないでほしい、もっと一人ひとりをみてほしいという希望が書かれている。若者を一口にして語るのが難しいことは、いつの時代も同じだろう。それを「念頭」におきつつ、あることを十把一絡にして苦言を呈するのは、大人の義務でもあったろう。かつて、大人が若者に対して、個々にではなく全体に対して物申したのは、たとえひとりに対する発言であっても、それは全体への波及効果をねらっていたし、実際にその効果が期待できたからである。だから、「最近の若者は」という物言いは、教育の言葉、つまり大人が若者に向ける指導の言葉として存在した。

ところが、大人がひとくくりの言葉で語ることの危

うさやもろさを忘れ、さも当然のように語るとすれば、若者はそこに大人の怠慢をみてとる。また、個人が重視される時代になると、「みんなといっしょ」扱いされることへの疑問もでてくる。となると、波及効果を期待する物言いは、受け手に疑問視されるようになる。そのあたりの事情が後半部の発言となる。

さらに、感想②には、「最近の大人は、私たちと変わりないじゃないか」というより、「もっとひどいんじゃないか」と、大人への物言いがされている。「最近の若者は」という物言いを逆手にとって、「最近の大人は」といういい方をし、反発する。この物言いは、大人側をドキッとさせる。それは、若者への指導の言葉として、大人が一方的に独占的に利用できた言葉による切り返しで、反論しにくいからである。

とはいえ、その物言いの言葉が大人に届かないこともみえていて、「なにをいつても無駄だ」という諦めの気持ちを生んでいる。

## 1.2 自尊感情や自己信頼が低い若者が増えている

ところで、これらの学生にみられる大人への反発をよそに、若者ダメ論を受けいれる若者も少なくない。

そこで、2人の学生の意見について、どう思うかを受講生に尋ねることにした。その際、考えるヒントとして、意見の発端になった「最近の若者は」ではじまる語りに、改めて注目するように促した。

このため、翌週の12日の授業のラストで、発問を工夫し、「大人が発する、若者に対する肯定的表現にはどんなものがあるのか。あるとしたら、だれがどんなことをいつているのか」と投げかけ、授業評価用紙に記入するよう求めた。

すると、その日受講していた学生100名のうち、34名から回答があった。うちわけは、27名から肯定的表現が、4名からどちらともとれる微妙な表現が寄せられた。また、3名からは、否定的表現しかないという声が出た。残りの学生は、無回答。若者が若者をみて、肯定的表現がなかなかみつからない状況が印象に残った。

若者への肯定的表現がなかなかみつからない状況は、いま自尊感情や自己信頼が低い子どもが増えていることと無縁ではないだろう。

たとえば、ベネッセが継続的に行っている調査をみよう。1987～88年にかけて行われた、世界の4地域（東京・仙台・岡山、ソウル、タイペイ、シアトル・ヒューストン）の小学校5年生を対象とした比較調査で、子どもの自己像として、スポーツのうまさ、友達

から人気のある子、よく勉強のできる子、正直な子、親切な子、よく働く子、勇気のある子、の7項目について、それぞれ該当するかどうかを尋ねている。ソウルの子どもが友達から人気のある子という項目で唯一最低になる以外、そのほかの項目ではすべて日本の子どもが最低だった。しかも、男子に比べ、女子の自己評価が低かった（福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ 国際比較調査「7つの都市の子どもたち」』vol. 8-10, 1989）。

1989～90年にかけて行われた、世界の4地域（東京・札幌・福岡、バンコク・ロブリー、オークランド・ウェリントン、トランス・ガーディナ；ロサンゼルス郊外）の小学校5年生を対象とした比較調査では、日本の子どもは質問項目7つ全部で最低だった（福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ 国際比較調査（2）「都市環境の中の子どもたち」』vol. 10-9, 1990）。

1992年に行われた世界の4地域（マルメ・カールスクルーナ～ストックホルム、ハルビン・シンヨウ、サクラメント、東京・札幌・仙台・名古屋）の小学校5年生を対象とした比較調査でも、日本の子どもは、前回調査同様、質問項目7つ全部で最低だった（福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ 第3回国際比較調査「都市社会の子どもたち」』vol. 12-4, 1992／福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ 第3回国際教育シンポジウム報告書「都市社会の子どもたち」』vol. 13-2, 1993）。

1993～94年にかけて行われた、世界の5都市（上海、ソウル、ロンドン、ニューヨーク、東京）の小学校5年生を対象とした比較調査では、同様の質問項目で、韓国と日本の子どもたちの自己評価が低かった（福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ 第4回国際比較調査「家族の中の子どもたち」』vol. 14-4, 1994）。

1995～96年にかけて行われた、世界の6都市（東京、ソウル、北京、ミルウォーキー、サンパウロ、オークランド）の小学校5年生を対象とした比較調査では、これまでの質問項目から「スポーツのうまい子」が落ちて6項目でなされたものの、日本の子どもたちの自己評価は全項目で最低だった（ベネッセ教育研究所『別冊 モノグラフ・小学生ナウ 第5回国際教育シンポジウム報告書』1997）。

ベネッセによる、一連の調査以外の結果はどうだろうか。

古荘純一らのグループが2001年度から小中学生対

象に行っている、子ども向けのQOL（Quality of Life）尺度の研究によると、日本では小学校4年生ごろから自尊感情が急激に低下しているのに対し、ドイツでは日本ほどの低下はない点が指摘されている（『子どもの健やかさ 客観的指標で把握』『日本教育新聞』2005年4月25日）。

IEA（国際教育到達度評価学会）が2003年に実施した国際学力比較調査では、日本の子どもの、学習への自信が低いと報告された。

また、日本青少年研究所が2003年に行った日米中韓4ヶ国の高校生の意識調査では、「全体としてみれば、自分は満足している」という項目で、日本が最低だった。

もちろん、これらの結果には、日本文化のもつ謙遜の美德や、日本の若者や子どもの内省力の高さが反映していることへの十分な目配りが必要である。

とはいえ、ある程度の留意事項を考慮しても、日本の子どもたちの現状は気になるところである。自尊感情や自己信頼が低く、自分を否定的にばかり表現する子どもたちからは、明るい未来像がみえてこない。自然と、世間の彼らへの評価も低くなる。いきおい、「最近の若者は、なってない」という否定的表現を招くことにもなる。

### 1.3 教育効果をねらった研究の目的と方法

そこで、まず「最近の若者」への肯定的表現、否定的表現、微妙な表現などの若者評を把握し、続いてこれらの若者評を若者自身がどう受けとめるかを調べることにした。そこで検討する課題は、①若者評を若者がどう考察したか、②その考察が若者になにをもたらすか、などである。結果として、この試みに参加した若者の社会化を促すことを目指すことにした。

このために、2004年9月27日、甲南女子大学人間科学部人間教育学科の3年生対象の専門科目「教育社会学B」（受講生87名）で、二段構えで調査を行うことにした。まず、第一段階として、翌週の10月4日までにレポートを提出してもらった。課題は、若者評を示す3項目（①肯定的表現、②否定的表現、③微妙な表現）を設定し、これらの項目のうち2項目以上を選んで、自分の周辺でだれがどんな表現をしたかについて、該当する表現を各項目1つ以上紹介するというものである。その結果、79名から回答があった。

それから、第二段階として、これらをプリントにまとめ、翌週の10月11日に全員に返却し、これらを読んで、感じたことや考えたことをまとめて、改めて10

月20日までに提出してもらった。その結果、76名から回答があった。

なお、「どの年齢層を若者と呼ぶか」についての判断は、学生が自分周辺で若者評を把握する際は発言者に、また若者評を学生自身がどう受けとめるかをまとめる際は学生に、それぞれ任せることにした。

早速、記述内容を検討しよう。

## 2. 若者評に対する若者による考察

若者観は、人びとと若者との相互作用のあり方を規定し、その相互作用のあり方が若者の行動や発達のあり方を規定する。

今回集められた若者評を、学生はどのように受けとめたのだろうか。ここでは、1) ひとくくりにされること、2) 否定的な見方をする背景、3) 日本社会の変貌が生む若者像、4) 若者への評価のねじれ現象、5) 自分に生じた学び、6) 学生からの要望、の6つの観点でまとめた。それぞれ、学生の記述を拾いながら紹介しよう。

### 2.1 ひとくくりにされること

まず、「最近の若者は、…」でひとくくりにされる語り口について、学生はどのような思いで受けとめたのだろうか。

#### 2.1.1 否定的に表現されることへの反発

ひとまとめにして語られるとき、「若者とひとまとめにされるのは、どうもイヤな気分になった」という記述にあるように、イヤな気分を生みがちである。それは、どうしても否定的な表現に出合うことになりがちだからである。

とくに否定的な決めつけは、反発を生む。それは、「一部の若者の行為で、すべての若者がそうだと決めつけてほしくない。メディアがそういう若者ばかりをクローズアップするから、よりいっそう若者のイメージが低下するのだと思う」という言葉となる。

この矛先は、かつて大人も同じだったんじゃないかという声につながる。たとえば、「化粧が濃い、派手、オシャレ、みんないっしょにみえるなど、容姿についての批判が多かったけど、ファッションに夢中で、オシャレになりたくてみんないっしょのものを身につけたり、メイクもきれいになろうとがんばるから濃くなっていったって…、っていうのが若さなんじゃないかな、そういう部分っていまも昔もいっしょじゃないかなと感じました」が該当する。

これがきつい表現になると、最近の大人の方がなっていないという大人批判となる。たとえば、「よくでていることで、携帯のマナーについての批評は、若者に限ったことではないように私は感じます。電車に乗っていてよく目につくのは、おぼさんの携帯での大きな声での会話や、背広を着た人の携帯での仕事のやりとりで、若者以上にあると私と思います」や、「見た目が派手=非常識、の図式が成り立っていることに驚いた。これは、否定的表現において、マナーが悪いと認識されていることによるものなのだろうと思う。若者でなくとも、マナーのなってないオトナは、たくさんいるというのに」、「よく大人は『最近の若者は』という言葉の口にするが、常識がないとか電車のなかでのマナーが悪いというのは若者だけではないし、どちらかというと、最近電車でのマナーなどは大人の方が悪いと思うことが多々ある。電車のなかでのマナーだけではなく、否定的表現は若者だけにいえることではないと思った」となる。

#### 2.1.2 否定的に表現されることへの悲しさや痛み

否定的評価に悲しみや痛みを覚える人もいる。

悲しさを表明するものとしては、「すべての人のマナーが悪いわけではないが、少数の人の行動が『最近の若者は、マナーが悪い』とひとくくりにされるのは悲しいことだなと思いました」や、「ひとつの集団として、まとめてみられているように感じました。それは、悲しいです。なぜなら、若者でも親切な人や礼儀がいい人など、いろいろな人がいるのですから。私たち一人ひとりをもっとみてほしいです。若者はきっとさまざまな新しいことに挑戦する力をもっていると思うし、これから将来を創っていただけるのですから」などがある。

痛みの表現としては、「年配の方の意見に、みんながみんな同じではないのにと腹立たしく思うこともありましたが、意見を読んでいると、自分にあてはまると感じることもあり、胸が痛く思えました。私が、高校生をみていて、自分のころとは違うと思うのと同じように、年上の方から見ると、若者の行動は信じられないことなんだろうなあと感じました」が該当する。

#### 2.1.3 ひとくくりにしない大人に出会った安堵感

若者をひとくくりにせず、まして否定せず、いいところもみている大人がいることを知った安堵感やうれしさを述べている意見もある。

安堵感としては、「自己主張ができるとか活動的であるなどの意見は、とくに最近の若者に限ったことではないような気がする。親やそのまた親の世代の意見

としてでた、自己主張ができるなどの意見は、その人たちが『若者って、そんなことができていいね』というふうにいってるようにみえた。『大人になって社会にでて、自分の主張ばかりはしてられない…。けれど、若いうちはできたらいいね』っていうふうにとくに最近だからというわけではないのに、きっと親世代だって若いときはそうだったろうに。でも、『最近の若者は、自由ね』なんていってるように思う。否定的表現でも同じだ。最近も昔もたいして変わらないんじゃないだろうか？ なんだか『最近の若者は』なんていう語りだしからなんだかちょっと悪い感じがし、どんな子もひとまとめにされてる感じがする。けれど、そうやってひとまとめにみるのは間違ってるという意見もあって、公平にみてくれる大人もやっぱりいるんだよね…と安心感もあった」がある。

#### 2.1.4 肯定的表現に出合ったうれしさ

うれしさの表明としては、「若者というひとくくりの表現のせいもあり、多少の先入観もあると思いますが、私はなによりもちゃんといい部分を理解してくれている大人の多いことがすごくうれしかった」や「最近の若者について、どうしても印象に残るのは悪いことばかりで、話でとりあげられるのも悪いことばかりで、いいところをみられていないように思えるなか、こうして改めていいところをあげられると、若者のよさがみえてきて、若者としてはうれしく感じました。そして、とても参考になりました」がある。

### 2.2 否定的な見方をする背景

大人は、とかく若者をひとくくりにして否定的に評価してしまいがちである。そんな大人の見方がでてる背景にはなにがあるのだろうか。

そこでは、大人の安易さや限界を指摘する声が少なくない。

#### 2.2.1 バラダイム効果～見方が評価を決める

若者への評価は、大人サイドのものの見方・考え次第で、事実をみる前に決まっているという指摘がある。たとえば、「一人ひとりの価値観によって、若者を肯定的に思ったり、否定的に思ったりするんだろうな」や、「常識がなっていないことを常識に捉われないととる人、自己中を自己主張ができると肯定的にとる人、冷めていることをクールととらえる人など、いろいろな捉え方がある。どう評価するかは、その人が若者を肯定的な感情をもってみているか、否定的な感情をもってみているかということにも関係しているのではないか」が該当する。

若者の悪いところ探しにはまり、いいところが目に入らなくなるという視野狭窄を指摘するものもある。それは、「ひとつ思ったのは、一回悪いところをみてしまうと、それがそのまま『すべての若者は』となっているのではないかということである」にみられる。

こうした指摘は、否定的表現にとどまらない。たとえば、「肯定的表現で気になったのが、電車で席を譲ること。これに関しては、若者に限ったことではないと感じる。常識的に考えて、ごく当たり前のように思うのは、私だけだろうか」という指摘がある。若者に限ったことではないものが若者に限ったことのように思われてしまう。

#### 2.2.2 健忘症～いいことしか覚えていない

大人世代の、自分が若いときのいいことしか覚えていないという健忘症を指摘する声もある。「私は、おばさんが化粧を一通り電車のなかですませている姿をよくみかけるし、常識のない人は年をとった人でもいつまでも常識がないと思います。大人は、自分たちが若かったときのことはいいことしか覚えていないようです。肯定的表現も否定的表現も昔とさほど変わらないのではないかと思います」がそれである。

#### 2.2.3 まなざしの誕生～おとなになった証し

いつの時代も不易と流行の部分がある。かつての若者も大人？へ移行し、若者との距離を感じるようになる。それが、若者というジャンルを生み、なんらかの視線を発生させる。それは、なんらかの違和感の発見にはじまる。そして、それへの対応として起こるのが自己肯定と他者否定という自己防衛反応だろう。

違和感の発見は、「若者は、確かに昔からみれば、変わっているだろう。だが、いつの時代でも若者は、大人からみたら違った生き物にみえるものでは、と私は思った。そして、この先も若者が時代に変化をもたらし続け、世の中は変わっていくのだろう」にみることができる。

否定的なまなざしの誕生は、「いつの時代でもそうだと思うが、大人は若者の考え方を理解するのに苦労し、『最近の若者は』と表現しているのだと思う。ファッションにしても音楽にしても流行があるわけで、時代の流れも変わってきている。これが時代の特性（特徴）でもあると思う。世代が違えば、価値観の違いも多少はある。他方、礼儀やマナー、ものの見方・考え方、さらにコミュニケーション能力など社会で生きていく上で必要な知識や技能の不足が大人から若者に対して多く指摘されている。みんなの表現を読んでも、どちらかというと父親の否定的表現が多かつ

たように感じた。10年後、20年後の私たちも、『最近の若者は』ときっと口にしていくような気がする」のように語られる。

### 2.3 日本社会の変貌が生む若者像

「最近の若者」を語るとき、それはその時代や社会と蜜月の関係にある。現代の日本社会を〇〇社会と呼ぶとき、たとえば、情報化社会や消費社会というように、〇〇にはいろいろな言葉を当てはめることができる。変貌する日本社会が新たな若者像を生んでいく。

#### 2.3.1 情報化社会

肯定的表現は、情報化社会に由来するものが多い。このため、その評価に対して疑念を挟む声が出てくる。

たとえば、「肯定的表現のなかで、少しひっかかった意見があります。それは、行動力があるとか努力する人が多いという意見です。私は、昔と比べて努力する人が増えたとは思えないのです。変わったといえば、情報収集する機会と手段が増えたということでしょう。最近の若者は、情報収集する機会や能力に長け、その情報を生かす方法を知っている人が多いのです。生かし方もいままでとはまったく違った広い範囲での事業であるため、周囲から見ると、動いている人が突出してみえるのでしょうか。また、実際に動いている人間の情報が昔と比べキャッチしやすくなっていることが原因だと思われます」では、情報環境の変化が新たな能力を必要とし、その習熟には若さがモノをいうとみている。だから、この環境ならできて当然だろうという見方を生む。

この見方は、同じ環境が整っていれば、いまの大人も若いときにできたはずだという推測につながる。それは、「肯定的表現といっても、昔よりいまの若者が偉くなったのではなく、生活環境が昔よりも進歩したから起こったものではないかと思いました。たとえば、視野が広がった、世界に通用するようになったという意見は、情報伝達機器が発達して起こったものではないかとか。昔の若者だって、いまのような環境におかれていれば、そういうふうになれたのではないかと思います。肯定的意見がこんな意見しかないのは、本当に問題だと思います。今後の日本を現代の若者が背負っていけるのか、本当に心配です」という表現となる。

#### 2.3.2 消費社会

肯定的表現は、消費社会に生きる現代の若者だからこそではないかという指摘を呼ぶ。「肯定的なところ

では、恵まれてるなど、これは現代の若者だからこそできることがいっぱいあるんじゃないかなと思いました」が当てはまる。

もちろん、消費社会の影の部分として、「人とのかわりがなくなってきたというので、確かに最近そういうことが苦手な人が増えてきて、実際に事件がおきたりしています。それは、モノがあふれすぎているこの時代にも関係があるんだろうなと思いました」という指摘もでてくる。

#### 2.3.3 核家族化社会

核家族化社会という視点では、「なぜモラルのない若者が増えているのか……。それは、すべて若者の責任とは限らない。いまの日本社会に問題があるのではないか。若者だけでなく、手本となる大人たちのモラルも希薄になっているように思う。核家族化が進み、他人に対して無関心になることで、相手の気持ちを考えない人が増えてきた。そんな社会がモラルのない若者を増やしてるのではないかと思った」をあげることができる。

多少強引だが、「私が気になったのは、いまも昔も本質的に変わっていないと書いている人の言葉です。確かに、いまも昔も心優しい人もいれば悪いことをする人もいて、それは変わりません。しかし、犯罪の低年齢化や虐待など、かなり変わったように感じます。とくに小学生が人を殺すという事件は、ショックで信じられませんでした」という文も、核家族化社会の枠に含めることが可能だろう。

#### 2.3.4 欧米化社会

日本社会の変貌を欧米化の観点からみるものに、「みんなの若者考を読んで思ったのは、最近の若者は外面も内面も欧米化してきているのではないかということです。容姿でみると、頭が小さくなり、手足が長く、昔に比べて全体的にスタイルがよく、昔からの典型的な日本人体型というような若者は少なくなっているような気がします。ファッションに関しても、欧米の影響がでているのかなと思います。内面的なものでは、自己主張ができるとか、はっきりモノをいうという表現が多かった気がするけど、これも日本人の、あまり意見をいわないという過去のイメージから大きく変わってきたと思います。だけど、それがいいことばかりにつながるかというと、そうは思えません。自分の意見をはっきりどんどん主張してしまうというのは、見方によっては、人の意見が聞けなくなっていて、一歩引いて考える、相手のことも考えるという気持ちがなくなっているともいえると思いまし

た。姿、形は進化していても、中身の進化はイマイチ!?という感じがしました」がある。

#### 2.4 若者への評価のねじれ現象

若者に対する、①肯定的表現、②否定的表現、③微妙な表現、という3つの評価から、学生がみたものはなんだろうか。

若者評の対象となった文章からキーワードを抽出しよう。すると、肯定的表現には、「自己主張ができること」や、「(ファッションなどのオシャレやスタイルといった)外見や見た目のよさ」、「個性的(な生き方)」、「(見た目とギャップのある)中身のよさ」などがあがってくる。

他方、否定的表現には、「自己中心」や、「(ファッションなどの)だらしなさ」、「個性的(な生き方)」、「(言葉使いやケータイ、電車でなどの)マナーの悪さ」、「(ルールを守らないなどの)自由奔放さ」などを拾うことができる。

微妙な表現では、肯定的表現と否定的表現をめぐる相剋がある。

これらを読み解くと、評価に関して、各種のねじれ現象を指摘することができる。

##### 2.4.1 表裏一体となった裏腹関係

まず、「自分が否定的な意見だと思っても他の人は肯定的に捉えていることがあるので、否定的な表現は、ある意味、肯定的表現を含んでいるものもあると感じた」という指摘にあるように、肯定的表現と否定的表現が表裏一体となった裏腹関係にあることに気づく。

これは、「自己主張ができること」と「自己チュー」を対比させると、わかりやすい。たとえば、「自己主張がはっきりできると答えた方が多かったが、逆にいえば、自己中心的な部分も大きくなっていると思う。他人に迷惑をかけなければとよく若者(自分も含めて)はいうが、それでいいとは思わない。社会がそのような理屈で成り立っているとは思わないからだ。ただ、自分があるものごとに対してどう考え、どう感じているかということを知ってみたいという部分が強くなってきているのではないと思う」や、「自己チューは、自己主張がはっきりしているというふうにもとることができるし、どんどん変わっている時代のなかで、昔から若者にはこんなことがいわれてきたのではないかなと思います。でも、他人のことより自分のこと、未来よりいま、って考える人が増えたのだと感じました。そして、その一人に自分も入

っているのだと思いました」、「肯定的表現のなかで、自己主張ができるといっていた人が多いようです。その一方で、自分の意見をもたないという否定的表現もありました。また、自分に正直、自己中心的、常識にとらわれない、自由な発想ができるといった意見も、肯定と否定の両表現のなかにみられます。これは、いい意味でも悪い意味でも、若者が我慢しなくなってきたからだと考えられます。我慢をしないため、すぐにアルバイトなどを変えるなど自由気ままにやったり、いわゆるすぐキレルというようなことになるのでしょう。しかし一方で、我慢をしないために、思わぬこともやってのけるように人の目には映ります。つまり、やりたいことをして成功すれば自由な発想ができるといわれ、失敗すれば自己中心的だと思われるのです」などが該当する。見方が正反対になる理由は三者三様であるものの、いずれもものごとには二面性があることを指摘している。

##### 2.4.2 線引きの難しさ

評価するときの、線引きの難しさを指摘する声もある。それは、見た目や個性にまつわる記述に現れる。たとえば、「服装や見た目に対する意見には、考えさせられた。オシャレ＝派手、とは違うと思う。その境目は微妙だな…と感じた」や、「個性があるとは思わない。似たような格好をしている人は多くいるし、話をしていると、みんなあまり変わらないんじゃないかと思う。でも、他人と少しでも違うことが個性だと思うならば、だれだって個性的なんじゃないかと思う。自分の価値観にとまった服装や生活を貫き通しているという信念があるなら個性的かもしれないが、そこまで逸脱したことを簡単にできるとは思わないし、望んでいるとしても、なんとなく周囲や環境と同化してしまうのが若者なのかもしれないと思った」をあげることができる。

##### 2.4.3 内面と外面の対比

肯定的表現と否定的表現の特徴の捉え方が、人によって正反対になりやすいのが、人間の内面と外面をどう捉えるかで起きている。

肯定的表現が内面的なことに多いという人は、否定的表現は外面的や表面的なことに多いと捉えている。たとえば、「否定的表現では、マナーが悪い、服装が派手、言葉使いが悪いなど、外面的なことが多いと思った。肯定的表現では、元気がよい、好奇心旺盛、のびのびしているなど、内面的なことが多いと思った。若者を一見すると、言葉使いとかマナーの悪さに目がいってしまっ

と思う。しかし、若者に少しふれあってみると、内面的なことがわかり、見た目よりもしっかりしていると感じられるのだろう。若者がカッコいいと思ってしていることが、大人にはマナーが悪いと感じられたり、新しいことはすぐに受け入れられずに常識がないと受けとられてしまうのだと思う。否定的なものと肯定的なことが両方あって若者なのかもしれないと思った」と説明する。

逆に、肯定的表現が外面的や表面的なことに多いという人は、否定的表現は内面的なことに多いと捉えている。たとえば、「全体的にみて、肯定的表現にはファッションなど表面的なこと、否定的表現には内面的なことが多かったように感じます。なかでもマナー・常識に関する否定的表現が多く、ルールですら自分ではないかと思っています。これは、自由でいい場面とそうでない場面をわきまえて生きることができない人が最近の若者に増えていることの現れではないかと思いました」や「肯定的表現で、多くの人がファッションや、いわゆる自分の見かけを指摘している結果に、まさにそうだなあと感じた。否定的表現には、根気がない、自己中心的である、ルールを守らない、だらしないなどがあつた」などが該当する。

このねじれ現象は、たとえば「マナーの悪さ」を、見た目の悪さという外面的なものとして捉えるか、心の悪さという内面的なものとして捉えるか、そもそもの捉え方の違いに端を発しているだろう。さらに、どこかでホメたなら、どこかでクサして、バランスをとるバランス感覚のなせる業かもしれない。いずれにせよ、とてもおもしろい現象である。

#### 2.4.4 世代間格差と世代内格差

視点としておもしろいのは、世代間格差に注目した記述である。それは、「肯定的表現には、本人や同世代の人の意見が多く、しかもファッションセンスがいいや、視野が広い、好奇心が強いなど、ポジティブな意見が多かったと思います。否定的表現では、親や祖父母世代から、マナーが悪いことや容姿の指摘が目立ちました。微妙な表現では、悪いイメージだけが先走り、でも一人ひとりをみるとそうではないのかも…と知っている大人もいることを知りました。少年事件が増えて、報道ではマイナスなところばかりいわれ、厳しい目もある割には、温かい目でみているのではないかと思いました」というものである。

さらに、これをもう一步進めたものとして、「服装が汚いという表現が、祖父母の世代に多いのが目につ

いた。それは、オシャレに対する世代間の価値観の違いだと思う。でも、私たち若者自身による表現となると、自分が現在いる環境によって意見がだいぶ違う」という、世代間格差と世代内格差を指摘するものがある。

#### 2.4.5 若者の二極化

「最近の若者」というけれど、それはひとくくりにできないという。たとえば、「自己主張ができる、ということが、肯定的な表現・否定的な表現・微妙な表現のそれぞれに入っていました。自己主張はできなくてはいけないものだけれど、しすぎると、逆に協調性に欠けてしまいます。その中間の微妙な部分が難しいと思います。この言葉が3つの表現に入っていることに疑問を覚えた反面、いろんな若者がいるということはこの表現が表しているのではないのかと、私は感じました」という文章がある。ここでは、いろんな若者がいるから、評価がわれることが指摘されている。

しかし、それは多様な若者がいるというより、二種類の若者がいるのではという。若者が二極化しているという指摘は、「大人からみて、いまの若者はやりたい放題、礼儀ができていないとか思われがちである。いまの若者は、それができている若者とできていない若者の差が激しいのかなとも思いました」や、「夢や仕事に対しては、二極にわかれるようで、しっかり見据えている部分と、どうしていいかわからず流されているとみえている部分があるように思う」や、「若者は積極的だという人もいるし、無気力で無関心だという人もいて、驚きました。確かに目標をもってない若者が多いけれど、自分が興味をもっていることに関してはすごくがんばるし、どちらの意見も正しいと思いました」などにみることができる。

#### 2.5 自分に生じた学び

自分に生じた学びには、現実を知るもの、過去をふりかえるもの、未来志向のものなどがある。自分たちが他者にどう映っているかを聞くことで、いろいろなものの見方があることを知り、改めて自分を見直す機会となり、今後どうしたらいいかを考える場となっている。

##### 2.5.1 現実を知った

今回、現実を知って、勉強になったし、おもしろかったという学生が少なくない。

勉強になったという感想には、「いままで、私と同じ世代の人が若者についてどうとらえているのか知る機会がなかったので、新しい発見になりました」や、



「母親、父親、バイトの店長など、年代によってさまざまな見方があったことがわかった。私たち同年代がみる“若者”と、親世代やそれより上の世代（祖父母など）がみる“若者”が、同じような意見もあればぜんぜん違う意見もあって、読んでて楽しかったし、勉強になった」、「〈若者〉という立場である私たちが、〈若者〉はこのような思われ、自分たちも自分たち自身をこのように感じているということを改めて知り、自問自答することによって、なにかいま現在の日本社会にとっての若者の存在を知ることができた、そんな気がした」、「今回、みんなの意見を聞くことにより、プラス面・マイナス面それぞれの意見を知ることができてよかった」などがある。

おもしろさを感じたという感想には、「全体をみると、どれも同じようなことを思っている人が多く、おもしろく感じた。否定的表現を多く書いている人もいて、自分が思いつかなかったような表現があり、『なるほど』と思った」や、「読んでみて、いろいろ若者について思っている意見が聞けて、そういうふうに見ているのかと思うとおもしろいなとか、残念だなという思いがしました」などがある。

#### 2.5.2 自分を見直すいい機会となった

自分を見直すいい機会になったという感想では、「こんなふうに自分たちのことを肯定的・否定的・微妙な表現として捉えてみることは、改めて自分たちのことを世間がどんなふうに思っているのか、同世代の人が自分たちをどうみているのかを知ることができ、自分たちを見直すきっかけになったと思います」や、「みんなの書いたものをみて、納得いくものやそうでないものがたくさんあった。いろいろな世代の人たちが、若者に対して思っていることをみれる機会は減多にないので、今回知れてよかった。私も若者の部類に入るので、否定的なところをみて、直していきなと思った」、「みんなの若者考を読んで、いまの若者は、自分を含めて、まわりからこんなふうに思われているんだなあ～と思いました。否定的表現のところ、自分にも当てはまることがあり、素直に受け入れて、改めようと思いました」、「自分のなかで一番問題だったのは、自分も『若者』といわれる年齢であるというのに、なぜか他人事のように思っていることです。先生の授業中に感じる感覚と同じだと思います。自分と向きあわず、現実逃避しているのが実感できました。それも、最近の若者にみられる否定的表現のなかに含まれるものであって、自分も普通にそれをしてしまっている。やっぱり自分も最近の若者であ

り、最近の若者の典型でした。でも、私には幸いにも先生の授業を受けて、自分と向きあう時間をつくる機会があります。その時間を活かして、自分をみつめ直していきたいです」、「時代の変化とともに、世間がもつ若者像も少しずつ変化しているだろう。なにかと非難されがちな若者だが、厳しい現代ゆえに、いまの社会に適応しようと若者自身も苦しんでいる。ぜひ広い心と視野をもって、若者を温かく見守ってほしいと感じた。このような考察をすることで、身をもって現状を感じることができたと同時に、改めて自分自身、自分の生活、そしてまわりの環境を見直し、考えさせられるいい機会となったのは事実だ」などがある。

#### 2.5.3 自分の課題を発見した

自分を見直した結果、自分の課題をみつけた学生もいる。たとえば、「微妙な表現のひとつに『いつでもおはようという』というのがあるのを読んだとき、すごく納得してしまいました。私たちは、たとえ夕方友達に会っても、その日会うのがはじめてなら、『おはよう』といいます。それが、私たちのなかでは当たり前になっています。私たちが当たり前に思っていることでも、よく考えればおかしいことはたくさんあると思います。若者考を読んで、改めてそう思いました。自分の若者に対する見方も視野も広げてみようと思いました」という記述がある。

もう少し具体的な記述としては、「若者をひとくくりにして考えるのは、本当に難しいと思いました。若者はいまも昔も本質的に変わっていないといった意見や、昔とは違うがそれなりの価値観をもって生きているという意見を読んで、いつの時代も若者は大人や社会からみれば、常識が足らず、自己中心的な存在であると思いました。そして、そのパワーが新しい時代をつくっていく原動力になっていくのだと思います。しかし、若さゆえに時代に流されやすく、まわりにあわせて生きてしまったりします。また、早くに夢や目標をもてた人とそうでない人とで、若いうちは差がでてしまうと思います。それをいまの時点で、若者はこうだといっても一人ひとり抱えている問題や気づく時期は違うと思うので、もしなにかをみつけたときにいつでも思いつきやってみる力をなくさないようにしなければと思いました」や、「最近の若者は、行動力があるっていうものが多かったけれど、その行動力をどう使うかが重要なのだと思いました。自分のために使うのか、他人のために使うのか…」がある。

#### 2.5.4 社会的な課題を発見した

自分の課題ではなく、社会的な課題を発見した学生

もいる。たとえば、「肯定的な面はいいにしても、なぜ否定的意見にマナーがなってないなどの行動についての言葉が集中するのか、なぜそのような若者が増えてしまったのか、若者をとりまく環境がどうかかわっているのか、知っていききたいと思います」や、「人によっていろんな捉え方があって、おもしろかったです。『個性が大事といいながら、みんな似たような格好や行動をしている。結局、なにがしたいのかわからない』という表現があったけど、これは的をついているなと思いました。最近の若者は、自分も含めて、こういう矛盾した点が多いと思います。全体的に、肯定的表現よりも否定的表現の方が多かったけれど、これも納得してしまいました。昔に比べて最近の若者に悪くなった点が多いなら、それには背景があるはずだけど、それを知って、これからこんな若者が増加しないための対処法を考えていきたいなと思いました」などがある。

これから派生することとして、「これからの日本の社会を創ってゆく若者たちは、どう変わっていくのだろうと思いました」、「これから先、若者のイメージがよい方向にいってくれば安心できるが、いまのままでは不安になる」という視点をあげた学生もいる。

## 2.6 学生からの要望

学生からの提案がある。それは、大人への要望が多い。

### 2.6.1 大人はもっと若者に教育指導をして

まずは、大人はもっと若者に教育指導をしてほしいという要望がでている。それは、「私は、今回島田先生がプリントアウトしてくださった若者考を読んで、もっともだなと思ったことがたくさんありました。このようにみんなの意見を知ることにより、自分の考えの幅が広がったと思いました。とくに考えさせられたことは、否定的表現です。なかでも、礼儀がなくなっている、無神経な人が増えたなどは、実際私自身が親によく注意されることです。自分でもダメだと思っても、つい行動に移してしまったりしてしまいます。それは、まわりの人に甘えているからかなあと、私は思っています。反対に、若者に対しての肯定的表現もたくさんあり、驚きました。うれしかったのと同時に、親や近所の方はいろいろとよくわかっていらっしゃるなあと感心しました。気づいているなら、大人の方がもっと若者に注意してほしいと思います。言い方次第では、きっと若者も耳を傾け、改善の方向に向かうのではないかと思います！」と、「常識をはずれ

ているなら、教えてあげなくてはいけない。もしはずれているなら、教えるのは親が一番だと思う。その親の世代から常識がないといわれるのはおかしいと思う」にみることができる。

### 2.6.2 大人ももっと時代とともに柔軟に生きて

時代が変われば、人も変わる。もちろん、変わらない部分もある。そこで、不易と流行をめぐって、摩擦が生じるのは自然な流れだろう。そのバランスのとり方が難しい。

そこで、「肯定的な表現と否定的な表現には、微妙な関連性があると感じた。たとえば、肯定的な表現に、視野が広い、行動力やチャレンジ精神がアップ、自己主張ができる、夢に向かってがんばる人や個性をだそうとしている人が多いとある一方、否定的な表現に、無気力、無関心、夢がない、個性がないなどがあり、多くのことが肯定否定の両方に書かれていた。また、幅広い世代の人が、若者のマナーが悪くなっていると感じている。ひとつ私が思ったことは、大人は自分たちの時代と比べすぎている気がするのだ。時代が変われば人も変わる。なにもない時代に育った人たちが若者の服装をみて派手だと思うのは当たり前だとも思う。よい伝統やマナーを守りつつ、その時代時代に適応させていくことが大切だと感じた」という意見がでてくることになる。

### 2.6.3 お互いがお互いを尊重しあって

若者と大人の両方に要望するものとして、若者には古きよき伝統を大切に、他方、大人も若者に対する偏見をもたないようにしようという提案がある。

まずは、「とくに多い意見は、見た目についてでした。派手、チャラチャラしてるという否定的な見方から、オシャレ、スタイルがよい、スタイリッシュといった肯定的な見方まで賛否両論あり、読んでいておもしろく感じました。また、見た目だけでは判断できないという意見は、いまの若者をよく表していると思います。自分の意見を通したいときや相手に認めてもらうときは、それなりの態度や身なり、話し方などを選ぶ必要があります。しかし、いまはそれができない若者が多いのではないかと思います。見た目やマナー以外での肯定的意見は多いことから、性格そのものに問題があるのでなく、否定的意見に多くみられたマナーの低下による TPO をわきまえない考え方の蔓延が原因のひとつではないかと思いました。若者が古きよき恥じらいやマナーを意識し、大人が若者に対する先入観を考え直せば、人に親切にしても見た目で後ろ指を指されるといったことが少しでも減るはずだと思

ます」というものである。

より目配りが行き届いたものとしては、「肯定的表現の多くは、最近でなくても、私の親や祖父母が若者のときにも当てはまることではないかと思います。そのため、できて当たり前という潜在意識が大人にあり、若者のよい面に気づいてもらえないことがあるのではと思います。否定的表現はとても多く、なかでも携帯についての表現が多く、最近ならではの傾向です。携帯が普及して、日々の生活が便利になった反面、若者は依存症になる、時間にルーズになるなどの悪い影響もでています。携帯は、マナーを守り、使い方や携帯とのつきあい次第で、私たちは気持ちよく便利な生活が送れます。また、持久力がない、責任感が薄い、人・親に頼る、考えが甘い・軽い、現実逃避をする、まわりにあわせるなどの意見が多く、最近の若者は自分にとても甘く、精神的にも肉体的にも弱い人が増えてきているのかと思いました。しかし、若者のすべてがそうではなく、がんばる子とがんばらない子の差がとても大きいです。また、やることはしっかりやっているが、髪を染めたり、お化粧する子が増えたため、見た目で悪い印象を与えている人も増えていたと思います。常識がない、マナーが悪い、将来を考えていないという意見は、人にも迷惑をかけていることなので、これらは私たち一人ひとりが考え直し、また努力で改めることができる意見だと思いました。私たちは、地域、家族、学校などの集団のなかで協力しあって生活をしているので、そのなかにはルールもできて、マナーや常識も生まれてきます。これから、集団生活していくためにも、守るべきことは必ず守り、みなが気持ちよく生活を送ることの大切さを、私たち若者はより理解する必要があると思いました。また、さまざまな意見を読み、自分に足りないところや自分の悪いところを改めて発見することができたので、改善して、素敵な大人になりたいです」という指摘がある。

#### 2.6.4 大目にみて

若者も、やがて大人になる。そのとき、若気の至りに気がつく。経験してわかることもある。だから、教育的配慮として、大目にみてはという意見もでてくる。

これは、電車内のマナーに関する記述にみられる。たとえば、「女子高生が、電車のなかなど公共の場所で生着替えをしている子がときどきいる。欧米では、人前で化粧をするのは娼婦であり、このような行為を一般人が平気で行うのは日本だけであるといわれてい

る。高校時代、車内でのマナーが厳しく問われるようになるまでは、私も電車内で化粧を平気でしたり、大きな声で通話をしたり、ふざけてまわりのお客さんに迷惑をかけてしまったこともある。いま客観的にこのような行動を思いかえしてみると、情けなくて恥ずかしくなってしまう。社会のマナーの悪さについてもう一度自分を見直し、改善していこうと思う」や、「私は高校生とき、電車で座るところがないと普通に地べたに座っていました。だけど、いまはそれがよくないことだと解かっています。だから、その表現からそういうことをしている若者だって、私と同じように一度経験をしてから気づくこともあるんじゃないかなと考えさせられました」などである。

判断の留保を促す、バランス感覚に富んだ発言として、「私がまだ高校生くらいだったとき、同じ年代の子らをみて、大人からは『近ごろの若者は』といわれるけど、そんなになくなってなくもないのと思っていた。でも、時間を経て、いま現在の若者たちについて考えたとき、肯定的に受けとめられることの方より否定的に感じることの方が多い。実際、私たちのころより現在の方が否定的な部分が多いのかと聞かれれば、けっしてそうではない。あのころみえなかったことが、いまになってみえるようになっただけである。それと同時に、いまの私にはみえないことが、若者にはみえているのかもしれない…」がある。

### 3. おわりに

「最近の若者」評には、否定的なものが多くを占める。それしかないのなら、若者の自己評価は低くても当然だろう。だが、「最近の若者」評に、肯定的なものはないのかというと、そうではない。

そこで、今回、学生に「最近の若者、…」という形で言葉をただ採集するだけでなく、肯定的な表現や、肯定的にも否定的にもとれる微妙な表現がないか、意識的に拾い集めるように指示した。

ところで、若者にとって重要なのは、集めた「最近の若者」評について、若者自身がどう受けとめたかである。若者自身が普段自分のことをどう思っているのか。他者である大人が若者をどう思っているのか。それについて、自分はどう思うのか。果たして、ウソっぽいと思うのか、そうだと思うのか。

結果は、当然のことだが、肯定的な表現はいくつもみつかった。とはいえ、肯定的な評価があればいいというものではない。一人ひとりにとっては、だれがいい

ったかにもよるし、自分に該当するかどうかにもよるし、それをどう受けとるかにもよるし、否定的評価とのバランスも重要である。

また、若者をトータルにみれば、文中に指摘されていたように、若者の多様化ではなく、二極化が進んでいるとしたらどうだろう。若者が自己肯定の高いグループと低いグループに二分すれば、高いグループの若者はますます高くなり、低いグループの学生はますます低くなるという、自己評価におけるマタイ効果がみられるようになるのかもしれない。また、大半の若者が自己評価の低いグループだとしたら、これに派生する社会問題は広範にわたるようになる可能性がある。

ところで、今回の試みでは、これに参加した学生の

社会化を促すという教育的なねらいがある。自分たちが若者評についてのデータを収集し、それらをまとめたものを検討することで、図らずも自分、あるいは自分たちを客観視する教育機会となるように目論まれている。それだけでなく、この論文を自分たちが読むことで、さらなる教育機会になるように編まれている。そして、後輩たちにも教育機会を提供することにもなっている。

若者の自己評価の低さが注目されるなか、こうした仕掛けを含め、若者の社会化を促すために、大人に、そして教育になにができるか、いま問われているのではないだろうか。